

## 優秀賞

「日本の進むべき道」

―「ひめゆり」が教えてくれたこと―

宮崎県立宮崎大宮高等学校 一年

清水 はなび

夢と希望を抱いて憧れの学びの舎の門をくぐったはずの少女たちは、どんなに無念だっただろう。今から七十四年前の沖縄戦で、ひめゆり学徒隊の多くの女子生徒たちが犠牲になった。私は高校入学を前に初めて沖縄のひめゆりの塔を訪れたとき、こう思った。子どもたちが命の危険に脅かされることなく、明るい未来を描ける世界をつくっていかなければならぬ、と。

今年の春、私は姉、母、祖母と三世代四人でひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館を訪れた。高校生になるにあたって、自分と同じくらいの年齢で命を落とした少女たちの真実を知りたいと思ったからだ。ひめゆり学徒隊とは、沖縄戦で主に陸軍病院での看護のために、前線に動員されて働いた、沖縄師範学校女子部・沖縄県立第一高等女学校の女子生徒たちのことだ。両校への入学は沖縄県下全域から生徒が集まる、難

関中の難関だった。生徒たちはそんな学校に入学できたことを誇りに思っただろう。資料館では、生徒たちの日常の様子がかがえる学校行事やクラブ活動の写真、裁縫箱などの持ち物が展示されていた。当時の生徒たちの楽しみは読書であり、私も大好きなマーガレット・ミッチェルの「風と共に去りぬ」が中でも人気だったと知ったときは嬉しかった。実際に訪れる前は、「ひめゆり学徒隊の少女たちがたくさん亡くなった」という事実しか知らなかったが、彼女たちの日常を知って自分との共通点を見つけられたことで、その存在を身近に感じた。

展示を見ながら歩を進めると、次第に学校生活が軍事色を帯びていったことがわかった。当時は女学校に入ると英語の学習ができるのが憧れであり誇りでもあったが、やがて敵国の言葉として禁止されるようになった。生き残った元生徒の方たちの手記を読むと、戦場での悲惨な様子がありありと伝わってきた。不衛生で苛酷な病院での労働、命がけの避難、集団自決。また、追い詰められた状況の下、生徒たちの間で交わされた会話の話題は「どういう方法で死ぬか」だったことに衝撃を受けた。また、若いのに、彼女たちが常に死の恐怖の中にいたということに胸が詰まった。民間人、学生までも巻き込んだ沖縄戦では、「お国の為に命を捧げる」ことが美德であると人々に植え付けられた。自分の命を守る

権利をあなたたちは持っているのだ、という正しい教育が行われていたら、こんなに多くの生徒たちが亡くなることはなかったかもしれないと思った。

展示の最後には、亡くなった生徒の顔写真と名前が並び、亡くなった場所なども記されていた。まだあどけなさの残る少女たちのいきいきとしてまっすぐな瞳が、私の胸を揺さぶった。「何人が亡くなった」という単なる数字ではなく、その人たちが確かに生きたという大切なひとつひとつの命の手ざわりを感じ、彼女たちが生きられなかった分も、まっすぐ堂々と生きようと思った。資料館を後にしたときは、入ったときからすでに三時間が経っていた。

沖縄を訪れたあと、私は自分自身の変化に気づいた。新聞やニュースでつらい報道を目にするたびに、当事者の立場に立って考えることがより多くなったのだ。今でもなお、世界各地では子どもたちが紛争などで命を落としたり、危険にさらされたり、教育を受けられなかったりと、悲しい現実がある。子どもはこれからの世界をつくっていく宝であり、子どもたちがいきいきと夢を語る社会の未来は明るいはずだ。そのためには私たちの住む日本には何ができるか。沖縄、広島、長崎、そして私の住む宮崎も含め各地で、語り部などとして戦争の記憶を風化させないよう努力している人たちがいる。今回訪れたひめゆり平和祈念資料館も、そんな人たちの

意思によって建設された。私たちはこのような人たちや犠牲となった人たちの思いと、絶対に戦争をしないという決意を次の世代へつないでいかねばならない。子どもたちが未来に希望をもてる世界を率先してつくっていかねばならない。

ひめゆりの塔を後にした私たちは、次に平和の礎を訪れた。亡くなった方々の名が刻まれた石碑が整然と並んだ先には、穏やかな海をのぞむ平和の広場があった。優しい白い雲を浮かべた青空の下に、白いゆりが一輪、ひっそりと咲いていた。そのとき、生き残った元生徒の手記の中で目にした言葉が心よみがえった。「もう一度、弾の落ちない青空の下で大手を振って歩きたい」。死と隣り合わせの戦場の真ただ中において、私と同年の少女たちの願いはただそれだけだった。「命どう宝」、そして子どもは世界の宝だ。すべての子どもが、砲撃の心配などない澄んだ青空の下で、駆け回り、歌い、笑い、好きなことを学び、そしてそれぞれの明るい未来を描ける世界をつくる。それが私たちが歩むべき道だと、白ゆりが言っている気がした。